

童謡と絵本の表現

— 形容詞と形容動詞 —

前田敬子

(2012年1月30日受理)

1. 動機

童謡や絵本の言葉の特徴とはどのようなものか。形容という切り口で以て、童謡と絵本それぞれの言語表現上の特徴を明らかにしたいと考えた。

2. 先行研究と調査方法

松田典雄「昭和期の流行歌の歌詞にみられる感情形容詞の一考察～『かなしい』について」¹⁾は流行歌の歌詞では感情形容詞が必ずしも一人称で用いられるわけでないことを説き、マーハ・ジョンC「童謡：その社会学的考察」²⁾が英語の童謡に形容詞がほとんど使われず動詞が多く用いられたり、強弱格や跳ねるリズムを持ったりすることを指摘する。子どもの文学を書く場合に形容詞の多用を避けるべきことは瀬田貞二『絵本論』にも触れられている³⁾。それらの示唆を受けながら、本稿では、形容詞・形容動詞の意味に重点を置いて論じたい。

国立国語研究所資料集14『分類語彙表-増補改訂版』⁴⁾の分類項目を基準として、童謡100曲と絵本50冊に含まれる形容詞・形容動詞を分類した⁵⁾。たとえば「りっぱな」とあれば1語として数え、「趣・調子」という範疇に分類する。童謡は『うたいつがれる童謡100』⁶⁾を対象としたが、念のため『うたえほん』3冊シリーズ⁷⁾80曲も並行して調べた。絵本はロングセラーを中心に選んだ56冊⁸⁾を対象とした。絵本の一覧は末尾に示す。

3. 調査結果と考察

童謡については『うたいつがれる童謡100』に含まれる100曲中に形容詞・形容動詞を少なくとも1つ含むものは77曲で、のべ308語の形容の言葉を含んでいた。『うたえほん』3冊シリーズの80曲中には57曲に形容の言葉が含まれ、のべ159語含まれていた。一方、絵本50冊の中には形容の言葉が643語含まれていた。『うたいつがれる童謡』の77曲、『うたえほん』の57曲、絵本50冊に含まれる形容の言葉を『分類語彙表』によって意味の範疇に分けた結果は、それぞれ表1～3の通りである。童謡には「色」を示す形容や「うれしい」「たのしい」等の「快・喜び」を示す形容が多い。絵本には「いい」「だめだ」等「良不良・適不適」を示す形容が最も多いことがわかった。なお0～2歳の赤ちゃん向けの絵本には形容詞が一切含まれないものも少なくない⁹⁾。「好悪・愛憎」を示す形容は、童謡においても絵本においてもそれぞれの形容の言葉の全体量の1割程度を占めるが、単語としては、童謡は「かわいい」が多いのに対し、絵本は「すきだ」が多い。

以下、具体的な用例を挙げ、童謡と絵本の表現について考えたことを述べたい。

(1) 「いい(よい)」の形容

絵本には「いい」が多い。643語の形容の言葉のうち76語が「いい」「よい」「ええ」である。後に置かれる体言が「好ましい」ことを示す単純な用例をはじめ、文脈の流れにそって意味をもたせたり自分と異なる相手の経験を辿り共感したりする複雑なものまで、多様な用例が確認できる。

- A いいものもってるよ。いいものもってるよ。
 こんどはちがうかな。(おんなじおんなじ)
- B くさのみってとってもいいにおい(わたしの
 ワンピース)
- C ふうちゃんがひとりでいいおかおをしま
 した。(いいおかお)
- D 「なんだか いいおとこに なっちまったぜ」
 (せんたくかあちゃん)

上記すべて体言を形容する連体修飾語として位置し、体言の「好ましい」性質を示すものである。その判断は客観性も備えている。特に③④は、社会的・文化的にも認められる良さ・適切さを示している。A Bは自分自身や自分と同質の仲間に喜びや満足感を与える「いい」、Cは周囲の大人をはじめ社会的に好ましいと認められる「いい」を示しており、Dは社会的・文化的な美醜の尺度が自分の内面でも「いい」と認められる状態を示し、「いいおとこ」の形で半ば一語化している。

《表1》『うたいがれる童謡100』

童謡の形容言葉(308語)の分類		語数	割合
1	色	84	27.3%
2	快・喜び	36	11.7%
3	広狭・大小	33	10.7%
4	好悪・愛憎	32	10.4%
5	良不良・適不適	23	7.5%
6	行為・活動	12	3.9%
7	形	11	3.6%
8	長短・高低など	11	3.6%
9	新旧・遅速	10	3.2%
10	味	9	2.9%
11	交わり	8	2.6%
12	存在	4	1.3%
13	事柄	4	1.3%
13	趣・調子	3	1.0%
14	光	3	1.0%

《表2》『うたえほん』

童謡の形容の言葉(159語)の分類		語数	割合
1	快・喜び	22	13.8%
2	色	21	13.2%
3	広狭・大小	18	11.3%
4	好悪・愛憎	18	11.3%
5	良不良・適不適	14	8.8%

6	長短・厚薄	10	6.3%
7	形	7	4.4%
8	才能	6	3.8%
9	存在	6	3.8%
10	恐れ・怒り	6	3.8%
11	必然	3	1.9%
12	新旧・遅速	3	1.9%
13	軽重	3	1.9%
14	苦悩	3	1.9%
15	詳細	3	1.9%
16	光	2	1.3%
17	必然	2	1.3%
18	寒暖	2	1.3%
19	美醜	2	1.3%

《表3》絵本50冊

絵本の形容言葉(643語)の分類		語数	割合
1	良不良・適不適	96	14.9%
2	広狭・大小	74	11.5%
3	好悪・愛憎	61	9.5%
4	色	38	5.9%
5	快・喜び	29	4.5%
6	力	28	4.4%
7	味	27	4.2%
8	長短・高低など	21	3.3%
9	趣・調子	18	2.8%
10	存在	17	2.6%
11	恐れ・怒り・悔しさ	13	2.0%
12	飢渴・酔い・疲労・睡眠など	13	2.0%
13	異同・類似	11	1.7%
14	難易・安危	11	1.7%
15	寒暖	10	1.6%
16	新旧・遅速	10	1.6%
17	美醜	10	1.6%
18	光	10	1.6%
19	安心・焦燥・満足	9	1.4%
20	苦悩・悲哀	9	1.4%
21	感覚	8	1.2%
22	特徴	8	1.2%
23	限度	8	1.2%
24	多少	8	1.2%
25	形	7	1.1%

次に述語の部分に「いい」が用いられる例を見よう。

- E シャツをはいたらどうなる? どうすればいいのかな? (どうすればいいのかな)

F 「きにいらなけりゃ もういっぺん あらってあげるよ」かあちゃんが いうと、「いい いい いい、これがいいよ」(せんたくかあちゃん)

E Fは両者ともに眼前に無いことやものを想起した上で「いい」と判断するものである。

Eは「目的にかなってふさわしい」ことを示す「いい」であるが、作中人物(「人物」には「動物」も含む。以下同じ)に向かって「(しゃつの) ふさわしい着方」を問うことで、読者にそれを想起させる。そして、社会的・文化的な適切さの判断を読者である子どもに求めることになる。Fは最適なものの「選択」を示す「いい」である。この場合、読者も作中人物カミナリとともに「従来の怖い顔」を想起し「描き直された愛嬌のある『いいおとこ』の顔」と比較して後者を選択して「いい」という作中人物の判断を理解する。

G 「もういいかい」「まあだよ」(うずらちゃんのかくれんぼ)

H 「はいいろおおかみだ。おれもいれてくれ」「まあ いいでしょう」(てぶくろ)

I 「おまえがいくらじょうずなだいくどんでも、ここへははしはかけられまい。けれども、おまえのめだまよこしたら、おれがおまえにかわって、そのはしかけてやってもええぞ」といった。だいくは「おれは、どうでもよい」といいかげんなへんじをして(だいくとおにろく)

GHともに相手に「許可」を示す「いい」である。Iは双方が互いに許容を示している。

以上、E以下の述語として位置する「いい」は、相手とのやりとりの文脈の中で具体的な内容が定まる「いい」と言える。文脈を辿り、作中人物双方の思惑を把握する力が読者に要求されている点が、Aのように単純にそのものの性質(属性)を示す用例と異なる。

J 「あっ、おかあさんだ」「よかったあ、おかあさんだったのかあ」(うずらちゃんのかくれんぼ)

K 「やあ、そらまめくん。ベッドがみつかつてよかったね。とってもしんばいしていたんだよ」

(そらまめくんのベッド)

L ちいさいちいさいねこのかおがのぞいた。ひかれなくてよかった！(ちいさなねこ)

JKLは、体験を通して味わった不安や恐怖との対比の上で「安堵」を示している。特にKLは、立場の異なる他者に感情移入して感じた喜びや満足を示す「よかった」である。作中の発話者から「そらまめくん」や「ねこ」という他者への共感を示すものだが、読者もまた自分と立場が異なる作中人物(そらまめくん、ねこ)への共感が求められる。絵本の経験をくぐりぬけて辿りついた安堵感は「よかった」という言葉で括られることを読者の子どもは絵本の言葉によって確認することになる。

M 「いいやい、いいやい。しっぽなんかなくても いいやい。」(はけたよはけたよ)

N 「いいなあ。いいなあ。ぼくたちも、おかあさんにぬってもらいたいなあ。」(はけたよはけたよ)

Mは「中断や終了」を示す「いい」を示し、Nはある種の「感動」を示す「いい」である。これらは、これまでの事の経緯を把握し他者を評価した上で、その他者と同質でなく、同質になりたくてもなれない気持ちを表明するものである。読者もまた絵本の中のこれまでの経緯をふまえ、作中人物同士の異なる立場を理解した上で、発話者の気持ちを理解することになる。

J以下の例は、絵本に含まれる長い時間を辿り、事の経緯を把握してはじめて理解でき、個性の差や過ごし方の差の認識があつてこそ理解できるもので、これまでの例と比較して一層高度な読解力を要するものと言える。

ところで、改めて「いい」という言葉を発している主体を順に見ると、ABは作中人物である。本文全体が作中人物の会話文で成り立っており、括弧無し表記の直接話法で読者に呼び掛ける。Eは括弧無し表記で、本そのものが主人公だけでなく読者にも問いかける表現だが、本が話す点でABに通じるものがある。Cは第三者の視点から書

かれている点でLと同じである。Dは全体が第三者の視点から書かれ、作中人物の直接話法が含まれるもので、Lを除くF以下のすべてと同様である。第三者の視点で文章が書かれる中に、作中の人物相互の言葉のやりとりがあり、その会話文に「いい」が使われている。

ABEは、本文そのものが会話文で成り立っており、本そのものや作中人物が読者に呼びかけるため、本は「読む」対象というより、本の方から積極的に読者に向かって「話す」もの、話しかけてくるものとして捉えられる。このことから、比較的年齢の小さい子ども向けに書かれた本だと考えられる。また、CやLは、側に寄りそう保育者や母親などが子どもに語りかけ、本の世界を案内するような書き方であり、これもABEに準じて、年齢の小さい子ども向けのものだと察せられる。つまり、ABC、E、Lは、その視点のあり方や表現の形式から年齢の低い子どもに向けられた本であると考えられる。

この表現のあり方と「いい」の意味を結び付けると、概して先の例文に付したアルファベットが後になるほど、社会性の広がり確認できるのではないだろうか。

作中人物が話す上記ABの例には、作中人物と同質の価値観や感覚を誰しもがもっているという前提がある。その前提に立って後に置かれる体言が好ましいもの、満足を与えるものであることを示す。上記CDやEFの例は、単に個人的な判断を示すものではなく、社会的・文化的な価値基準に照らした良さを表現するものである。GHIの例は会話の流れを把握し、状況や心情にそった言葉の意味を受容する力が求められる。Jの例のように作中人物に感情移入して気持ちを表明する例や、KLMNのように異なる立場の相手に共感を示す例等を見ることによって、読者もまた自他の立場の違いを前提とした共感の心情を体験することになる。

絵本の形容詞・形容動詞すべての中で「いい」が一番多いことは、乳幼児にとって最初に認識すべき価値判断が「いい・わるい」であることの象徴であろう。しかし、一方で「いい」は、立場の異なる相手への共感という高度な精神活動を反映

する形容詞でもある。自己の満足を示す表現から他者への共感を示す表現へと広がり複雑化する絵本の「いい」の用例から、子どもに期待される社会性の広がり確認できるのではないだろうか。

ところで、童謡の歌詞においては、「いい」はどのように使われているのであろうか。

『うたいつがれる童謡100』の歌詞で数えると全15例¹⁰⁾あり、「いい子(よいこ)」6例、「いいにおい」2例、「いいてんき」、「いい気持ち」、「よい町」「よいところ」「よき日」1例ずつ、「行きはよいよい」「いいでしょ」1例ずつであった。15例中13例が連体修飾語の形で使われており、後に置かれる名詞の好ましさを簡明に示す例である。『うたえほん』の用例に当たると、子守歌に「よい子」が表れている他、「きらきらぼし」の歌詞に「みんなのうたが届くといいな」、「すずめのおやど」に「ごきげんよろしゅう」の用例が見えるだけで、やはり絵本で確認したような多様な意味は見出せない。

(2) 「かわいい」と「すき」の形容

童謡の歌詞の「好悪・愛憎」を示す形容としては「かわいい」の用例が多い。

これは、歌詞が基本的には一人称の表現であるため作詞家の内面の大人心が歌詞に反映されることとともに、作詞が外面描写を基本とし、「可視化」をねらいとすることが影響していると思われる。また、形容詞が感情を示すものか、物の性質を示すものかの差は、形容詞の置かれる位置にも関係する。用例を見てみよう。

- ① かわいいかわいい魚屋さん ままごと遊びの
さかなやさん(かわいい魚屋さん)
- ② こじかのバンビはかわいいな(こじかのバンビ)
- ③ かわい かわいと からすはなくの かわい
かわいとなくんだよ(ななつのこ)

他にも「かわいいかくれんぼ」「金魚の昼寝」「兎のダンス」「靴が鳴る」「あの子はだあれ」「まってね」の歌の歌詞に「かわいい」が含まれ、『うたえほん』の例も補うなら、「メリーさんのひつじ」「せっけんさん」がある。これらの例はすべて、「か

わいっしょ」「かわいい金魚」「かわいいダンス」「かわいい小鳥」「かわいいあぶく」等、すべて連体修飾語として位置するため、表現の形式から言えば、上記①と同じである。

一般的に形容詞は、感情や感覚を示す「感情形容詞」と客観的な性質を示す「属性形容詞」に大きく二分されるのだが、感情形容詞の中には、連体修飾語で用いられるときに後にくる体言の性質を客観的に述べる性質を帯びるものがある。『形容詞の意味用法の記述的研究』には次のように書かれている¹¹⁾。

感情形容詞が述語になっているばあいでも、属性表現的に用いられることはある。しかし、述語と名詞の位置が入れかわって、感情形容詞が連体修飾語の位置を占めるばあいは、もっと属性表現的になりやすいようである。

もっとも、「すべての感情形容詞が属性表現の性質を帯びることがあるとも言えない」として、「すき」は属性表現化が起りにくく、「かわいい」は感情と属性の両方を示す形容詞であると述べられている¹²⁾。

このことをふまえて、「かわいい」の語の位置から意味を検討すると、上記①は連体修飾語の用例であるため、「かわいい」という性質が、表現する側の個人的で個人的な感覚による判断でなく、体言「魚屋さん」の属性、即ち「魚屋さん」に備わった「かわいい」という性質を示すものと言える。①②③以外の多くの例もすべて連体修飾語として位置するため、体言に備わった客観的な属性を示すものと言って、童謡一般の外面描写の傾向を指摘することができる。

前項で取り上げた「いい」についても、形容詞の位置から言えば、連体修飾語として位置するA～Dは属性的表現と言って、「いい」性質が体言側に備わったものとして表現するが、E以下は表現者の個別的な感情・感覚によって「いい」と判断される意味合いが濃い。②は述語の位置にあり、位置から言えば、表現者の感情表出と言える。

ところで、形容詞の位置はひとまず置いて、「かわいい」と感じる心を考えて、①で「ままごと

遊びの魚屋さん」を「かわいい」と感じる心や、③でからすの鳴き声を「かわいい」と聞きなし、親がらすが子どもを思い「かわいかわいとなく」と捉える心は、子どもを庇護する親心と言えるのではないだろうか。そうして見ると、「かわいかくれんぼ」の歌詞に「ひよこ」「すずめ」「こいぬ」が登場し「きいろいあんよ」「ちゃいろいぼうし」「かわいいしっぽ」が見えるというのも、人間の親子の「まてまて」遊びや「かくれんぼ」遊びの光景の中で、子どもを「ひよこ」「すずめ」「こいぬ」に見立てて表現したものだと思えてくる。

歌詞は基本的には作詞家の一人称表現である。もちろん童謡の場合は、作詞家が子どもと心理的に一体化して子どもの立場で作詞するが¹³⁾、「かわいい魚屋さん」加藤省吾、「七つの子」野口雨情（「兎のダンス」も同様）、「かわいかくれんぼ」サトウハチロー等、「かわいい」の語を用いるとき、作詞家は知って知らずか、自らの大人心、親心を歌詞に反映させたのであろう。作詞にはたらく親の視点と先に見た外面描写の姿勢が歌詞の「かわいい」を支えていると考えられる。

翻って「すき」の形容動詞は、童謡の中では「ことりのうた」「ぞうさん」「サッチャン」の3例のみである。

- ④ ことりはとっても歌がすき かあさんよぶのもうたでよぶ（ことりのうた）
- ⑤ 「ぞうさん ぞうさん だれがすきなの」「あのね かあさんが すきなのよ」（ぞうさん）
- ⑥ サッチャンはね バナナがだいすき ほんただよ（サッチャン）

このように童謡に「かわいい」が多く「すき」が少ないのに対して、絵本では逆に「すき」が多く「かわいい」が少ない。

絵本の「かわいい」は、今回抽出した絵本50冊の中では、佐野洋子『100万回生きたねこ』に生まれた「こねこ」の形容として1度使われているだけである。

絵本に「かわいい」が少ない理由は、絵本というものが元来、子どもが主人公に自分を重ね合わせて読み、心理的な疑似体験をくりぬける性質

をもつため、基本的に、自分よりも無力で弱く可憐なものに対して抱く感情を示す「かわいい」の形容詞は、自らが無力で弱く可憐で庇護されるべき子どもが読む文章には、入り込みにくいからであろう。

では、絵本に多い「すき」の例を一部見てみよう。

- ⑦ おはなばたけを さんぼするの だあいすき
(わたしのワンピース)
- ⑧ 「ほらね だいききな にんじんよ」(きょうのおべんとうなんだろな)
- ⑨ せんたくの だいの だいの だいききな
かあちゃんが いました(せんたくかあちゃん)
- ⑩ このよで いちばん すきなのは おりょうりすること たべること ぐりぐら ぐりぐら(ぐりとぐら)

「すき」の対象が、先に挙げた童謡では「歌」「かあさん」「バナナ」であったのに対して、絵本では「さんぼすること」「せんたく(すること)」と行為・活動まで拡大されている。絵本では、「すき」「だいきき」(きらい、だいきらい)が主人公の性格や行動様式を規定し、それが話の展開の上で効果的に使われていることが分かる。

「すき」に関連する特殊な表現についても述べておきたい。本来「すき」は、感情の持ち主だけが断定的に使える言葉である。もっとも本人の発言で知れたり、外面的に表れる行動から内面の感情が察せられたりすることはあるものの、基本的には一人称の表現と言える¹⁰⁾。すると、上記⑦は作中人物が一人称で語り、⑧と⑩は作中人物の発話で一人称語りの部分であるから、自分自身の「すき」という感情を表現するのに不思議はない。しかし、⑨はどうか。第三者の視点で語られる文脈で、作中人物の「すき」という感情を説明していることになる。これはどういうことかと言うと、童謡や絵本では、本来、本人しか自覚できないはずの感覚や感情を、作者が自分の感情と同レベルに断定する表現方法が存在するということである。上記の例④⑥などもその傾向を帯びている。「すき」の感情は本人しか断定できないものとして見ると不思議な表現である。

だが、④⑥⑨の例は先述したように外側に表れる行動から内面を察して「おそらくは好きなのだろう」という気持ちを歌詞という制約のため省略ぎみに表現したのだとも解釈できる。特に④は、歌全体を小鳥になりきった上での表現と捉えれば、「私は小鳥。だから歌が大好き。母さん呼ぶのも歌で呼ぶ。こんなふうだね」と一人称で書かれたものと解釈でき、本来、一人称の感情を示す「すき」が使われていてもおかしくはない。そのため、文学特有の表現というには、もっと疑いようのない、次のような例を示す必要があるだろう。

佐野洋子『100万回生きたねこ』には「ねこは〇〇なんかきらいでした」等、主人公の「好悪」感情をも作者は知り尽くしていることを前提とした表現がある。

あるとき、ねこは王さまのねこでした。ねこは王さまなんかきらいでした。

この後、ねこは、「船のり」「サーカスの手品つかい」に飼われるが、ねこはそれら飼い主のことが「きらい」であったと続き、次に「だいきらい」という表現が出てくる。

あるとき、ねこはどろぼうのねこでした。ねこは、どろぼうなんかだいきらいでした。

この後、「ひとりぼっちのおばあさん」「小さな女の子」に飼われるが、ねこはそれら飼い主のことも「だいきらい」であった。そうして「きらい」が3回、「だいきらい」が3回繰り返される。その後、「だれのねこ」でもなくなり、

ねこは自分がだいききでした。

と「だいきき」が表現として生きる。そして白猫と出会い、愛を知るのだが、そこでは単語一つでなく複数の言葉の連なりで以て「だいきき」であることが表現される。「自分が」大好きだったねこは、「自分よりも」大好きな対象に恵まれたのだ。

ねこは、白いねことたくさんの子ねこを自分

よりも好きなくらいでした。

『100万回生きたねこ』に見られる、第三者が作中人物の感情を知りつくしたものとして描く、このような表現も含めて、絵本では「すき」「きらい」等「好悪・愛憎」の形容が、話の展開の重要な原動力としてはたらいっている。

以上、意味を中心に述べてきたが表現の形式についても若干補足したい。童謡にみられる「すき」3例はすべて「〈主語〉は〈対象〉が好き」という形に整っている。しかし、絵本ではこの形ばかりではない。⑦は一人称の文脈で書かれているので、「私は、お花畑を散歩することが 大好きだ」という基本的な文型の主語が省略されたものと見えるが、⑧⑨は複雑である。⑧は、「私〈主語〉は、にんじん〈対象〉が 大好きだ」を基本形だとすると「お弁当の中身は、私〈部分的主語〉の大好きなにんじん〈対象〉だ」の形になり、それが「ほらね、だいすきなにんじん〈対象〉よ」と「お弁当の中身は」や「私の」が省略されている。言うまでもなく「にんじんが大好きだ」の文と「にんじんが赤い」の文では構造が異なる。「にんじんが」は同じ表記だが、「にんじん」は前者では「好き」の対象であるのに対し、後者では「にんじん」は「赤い」属性を備えた主語であり、「赤い」の対象が「にんじん」なのではない。そのため「私」が省略されているわけでもない。「にんじんが赤い」「お弁当の中身は、赤いにんじんだ」「ほらね、赤いにんじんよ」に比べてみると「だいすき」「すき」の特性が明らかになるだろう。⑨も、「かあちゃん〈主語〉は、洗濯すること〈対象〉が大好きだ」を基本形だとすると「洗濯〈対象〉の大好きなかあちゃん〈主語〉がいた」と応用されている。⑩も「(はくら〈主語〉は) おりょうりすることたべること〈対象〉がこのよでいちばんすきだ」が基本形だとすると、作中歌「はくらのなまえはぐりとぐら このよでいちばんすきなのは、おりょうりすることたべること〈対象〉ぐりぐらぐりぐら」では語順がほとんど逆さになっている。もっとも、日本語を母語とする生活の中では、何の支障もなく習得できる表現かもしれないが、改めて文の形だけを見てみると、語順の複雑

さを確認することができる。

これら「すき」の表現は、話の展開上、重要な鍵である。⑧は他の動物と並ぶ中で「にんじんのすきな」うさぎの性質を際立たせ、⑨は「せんたくの大好きな」かあちゃんの性質を簡明に強調することがカミナリまで洗って干してしまう話の起点である。

絵本では、「すき」の語が行為・行動と密接に結び付くことによって、作中人物の個性が創られる。そこから、人物相互の双方向の力が生まれ、話が動き出す。

(3)「色」の形容

『うたいつがれる童謡100』では形容の言葉すべての中で、27.3%が「色」を示す形容で他の形容の項目と比べ最も多い。『うたえほん』では「色」を示す形容が13.2%と数値は低いものの、他の項目と比較すると「快・喜び」同様の高い割合を占めている。絵本で「色」を示す形容が形容全体の5.9%にすぎないことを思えば、童謡の歌詞に「色」の形容が多いことが改めて確認できるであろう。

このことは、童謡が言葉だけで絵画的イメージを眼前に描こうとするのに対して、絵本は元来、絵という視覚的な表現を備えているため、文は文によってのみ表し得る質の形容に傾くことを示している。制作段階に文が先か絵が先かの別はあるにせよ、総じて絵と文との守備範囲の棲み分けが起こることの表れであろう。

表1～3に示すように、童謡では「色」に限らず「形」「長短・高低」「新旧・遅速」「行為・活動」などの目に見える形容が多く、絵本には「力」「味」「趣・調子」など目に見えず感受性でとらえる形容が多い。

童謡の「行為・活動」の範疇に含まれる具体的な単語は「げんきだ」である。歌が人を勇気づけ慰めることを本領とするものの表れと言える。一方、絵本には「力」「味」「調子・趣」の範疇の形容詞が多いが、それは「すごい」「つよい」、「あまい」「おいしい」、「すてきだ」「りっぱだ」の単語に依る。絵だけでは十分に表現しきれない内容を言葉で補う性質が表れている。

視覚的か否かという観点で振り返ると、前項の

「かわいい」は、「すき」に比較して目に見える形容と言え。親心を反映する他に、どちらかと言えば外観を描写する「かわいい」の例を挙げてみよう。

- I メリーさんのひつじひつじひつじ かわいい
ね（メリーさんのひつじ）
- II 赤いべきたかわいい金魚（金魚の昼寝）
- III お手てつないで野道をゆけばみんな可愛い小鳥になって（靴が鳴る）
- IV ソソラ ソラソラ 可愛いダンス タラッタ
ラッタ ラッタ ラッタ ラッタ ラッタラ
（兎のダンス）
- V あの子はたあれ たれでしょね なんなんな
つめの花の下 お人形さんとあそんでる かわ
いい美代ちゃんじゃないでしょか（あの子はた
あれ）

上記 I～V の「かわいい」は外面的な特徴描写として受け取ることができる。先に述べたように II～V については、連体修飾語としての位置が属性的表現と傾くことにも合致する。もっとも、魅力的な外面だと感じる感覚そのものに表現者の主観が働いているとも言えるわけだが、「すき」が表現者の気持ちが専ら対象に向かって進んでいくのに対して、「かわいい」はあくまで対象の側に属す性質を描写してみせようとする言葉ではないだろうか。「すきだ」は形容動詞、「かわいい」は形容詞に区分されるが、「すき」には気持ちの動く動詞的な方向性が含まれており、「かわいい」には対象の側に貼り付けられた性質を示す違いがあるからだ。童謡が「すき」よりも「かわいい」を多く含むのは、童謡の歌詞が物事を外側から描写することを基本とするためであろう。

絵本では、「すき」「だいすき」「きらい」などの表現が、作中人物（動物）の一時的な感情・感覚を表すに留まらず、人物造形の重要な要素となり、行為・行動の基盤となって話の展開と密接に結び付くのに対して、童謡では「かわいい」の表現が作中人物の外面的な性質を描写するに留まると言える。

4. まとめ

以上、形容の言葉という切り口から、絵本の文と童謡の歌詞の特徴を見た。それぞれの特徴をまとめると次のようになる。

童謡は一人称の「快・喜び」を歌うのに対し、絵本は読者に「良不良・適不適」の判断を投げかけたり、「良不良・適不適」「好悪・愛憎」の形容で作中人物の個性化を図ったりする。ここから、童謡が概して一人称一方向の叙述だとすれば、絵本は語りかけによって読者の感受性を刺激したり作中人物双方がやりとりをしたりする双方向的なコミュニケーションの要素を含むと言える。

童謡には「色」「形」など外面的な描写の言葉が多く目に見えるように描写するのに対して、絵本には感受性によって把握し内面で味わう他はない「力」「味」「趣・調子」の形容が多い。ここから、童謡が限られた短い時間帯を絵画的なイメージとして切り取る言葉であるのに対して、絵本の言葉は前に前にと進む比較的長い時間軸にそって読み解かれるべき表現だと言える。

また、童謡には大人が子どもを庇護する視点が形容に表れる「かわいい」の例もあるが、絵本は水平なやりとりの中に子どもを引き込む表現である。内容面においても形式面においても子どもの発達に応じた細分化が見て取れる。

年齢の小さい子ども向けの絵本や童謡では、物事や人物の性質を明快に示す形容の例が多い。一方で、文脈上の意味の判断や立場の異なる他者への洞察を求める形容をもつ絵本もあり、年齢の高い子ども向けのものであることが推察される。ここにも、絵本の言葉が時間的な長さの中で読みとられるもの、つまり文脈にそって意味が限定され、読み解かれる性質をもつことが関係している。

意味だけでなく形式面でも、同じ形容詞を辿ると文型の難易度の差が認められる。年齢の小さい子ども向けの絵本では、形容詞が連体修飾語として体言の前に置かれ明快な属性を示すが、年齢の高い子ども向けの絵本では、述部に形容の言葉が置かれ、語順が入れ代わり複雑化するなど文型も多様である。

絵本は、第三者の視点から俯瞰する書き方をす

るものが多いが、直接話法の会話を内部に多く含むため、そこに作中人物の感情や判断を示す形容が含まれる。その上、作者が第三者の視点で書きながら、あたかも作中人物の感情を知りつくしているかのような特殊な表現方法がある。

形容の言葉を見るとき、表現者の視点の位置を無視することはできない。童謡や絵本の視点分析については稿を改めて論じたい。また、言葉領域を核とした小学校との連携を念頭におき、小学校の教科書の用例についても調査しつつある。いずれ稿を改めて論じたい。

《形容詞の調査に使用した絵本56冊の一覧》

- 1 安西水丸『がたんごとんがたんごとん』福音館書店(1987年)
- 2 石井桃子『ちいさなねこ』福音館書店(1963年)
- 3 いわむらかずお『タンタンのぼうし』偕成社(1978年)
- 4 いわむらかずお『14ひきのとんぼいけ』童心社(2002年)
- 5 うちだりさこ 訳・ウクライナ民話『てぶくろ』福音館書店(1965年)
- 6 内田麟太郎『かあちゃんかいじゅう』ひかりのくに(2003年)
- 7 エリック・カール もりひさし訳『はらべこあおむし』偕成社(1989年)
- 8 片山健『おやすみなさい コッコさん』福音館書店(1988年)
- 9 片山健『タンゲくん』福音館書店(1992年)
- 10 かんざわとしこ『はけたよはけたよ』偕成社(1970年)
- 11 きしだえりこ『きょうのおべんとう なんだろうな』福音館書店(1994年)
- 12 岸田裕子『かばくん』福音館書店(1962年)
- 13 きもとともこ『うずらちゃんのかくれんぼ』福音館書店(1994年)
- 14 キヨノサチコ『ノンタンおやすみなさい』偕成社(1976年)
- 15 こいでやすこ『かさかしてあげる』福音館書店(2002年)
- 16 こいでたん『とんとんとめてくださいな』福音館書店(1992年)
- 17 こいでたん『ゆきのひのゆうびんやさん』福音館書店(1992年)
- 18 小風さち『わにわにのおふろ』福音館書店(2000年)
- 19 こばやしえみこ 案『とっとけっこう よがあげた』こぐましゃ(2005年)
- 20 斉藤栄美『ふしぎなおるすばん』ポプラ社(1991年)
- 21 さかいきみこ『おくちをあーん』アリス館(2005年)
- 22 ささきまき『おばけがぞろぞろ』福音館書店(1988年)
- 23 さとうわきこ『せんたくかあちゃん』福音館書店(1978年)
- 24 佐野洋子『100万回生きたねこ』講談社(1977年)
- 25 せたていじ訳・北欧民話『三びきのやぎのがらがらどん』福音館書店(1965年)
- 26 せたていじ『だいくとおにろく』福音館書店(1962年)
- 27 せなけいこ『いやだいやだ』福音館書店(1969年)
- 28 征矢(そや)清『はっぱのおうち』福音館書店(1989年)
- 29 多田ヒロシ『おんなじおんなじ』こぐま社(1968年)
- 30 谷川俊太郎『めのまどあけろ』福音館書店(1984年)
- 31 長新太『キャベツくん』文研出版(1980年)
- 32 筒井頼子『おでかけのまえに』福音館書店(1981年)
- 33 筒井頼子『おいていかないで』福音館書店(1988年)
- 34 筒井頼子『はじめてのおつかい』福音館書店(1976年)
- 35 とよたかずひこ『ボートにのって』アリス館(1997年)
- 36 とよたかずひこ『どんどこももんちゃん』童心社(2001年)
- 37 トルストイ 内田莉莎子 訳『おおきなかぶ』福音館書店(1962年)
- 38 なかがわえりこ『ぐりとぐら』福音館書店(1967年)
- 39 なかがわえりこ『そらいろのたね』福音館書店(1967年)
- 40 なかやみわ『そらまめくんのベッド』福音館書店(1997年)
- 41 にしまきかやこ『わたしのワンピース』こぐま社(1969年)
- 42 長谷川摂子『めっきらもつきらどおんどん』福音館書店(1985年)
- 43 長谷川摂子『きよだいなきよだいな』福音館書店(1988年)
- 44 馬場のほる『11びきのねこ』こぐま社(1967年)
- 45 平山和子『くだもの』福音館書店(1981年)
- 46 東君平『くろねこかあさん』福音館書店(1985年)
- 47 松谷みよ子『いいおかお』童心社(1967年)
- 48 松野正子『かさ』福音館書店(1992年)
- 49 マレーク・ペロニカ とくながやすとも訳『ラチとらいおん』福音館書店(1965年)
- 50 マリー・ホール・エッツ まさきりこ訳『もりのなか』福音館書店(1963年)
- 51 モーリス・センダック じんぐうてるお訳『かいじゅうたちのいるところ』富山房(1975年)
- 52 安江リエ『ねえ どっちがすき』福音館書店(2003年)
- 53 レオ・レオニ 谷川俊太郎 訳『スイミー』好学社(1969年)
- 54 わかやまけん『こぐまちゃんのみずあそび』こぐま社(1971年)
- 55 わたなべしげお『どうすればいいのかな』福音館書店(1977年)
- 56 渡辺茂男『しょうぼうじどうしゃじぶた』福音館書店(1963年)

注

- 1) 松田典雄「昭和期の流行歌の歌詞にみられる感情形容詞の一考察～『かなしい』について」『国語国文学』24(1984-09)
- 2) マーハ ジョンC「童謡：その社会学的考察」『国際基督教大学学報 I—A 教育研究 4 4』(2002-03)

- 3) 瀬田貞二『絵本論』精興社164頁(1985年)。「形容修飾の言葉も、つかいすぎると力を失います。「赤い」「大きい」のような、事物の性質や状態をあらわす形容詞はつかわなければなりません、「さびしい」「美しい」「えらい」といった心理的な情感や評価のともなった形容詞は、できればつかわないにこしたことはありません。」
- 4) 国立国語研究所編『国立国語研究所資料集14 分類語彙表 増補改訂版』大日本図書(1964年)
- 5) 形容詞・形容動詞とは、前掲4)の「3. 相」の部類を中心にし、「1. 体」の部類とされていても「大変だ」「上等だ」など一般に形容動詞と認められるものも含めた。色名は「赤い、白い、黄色い」等は形容の言葉と判断したが、「赤、白、黄色、金、銀」等、活用語尾が無いものや、「金の鞍」「みどりの丘」等の色名+「の」+名詞の形や「水色メガネ」等の複合語も形容詞・形容動詞には含めず除外した。そのため、童謡の場合には、割り出した数値よりも実際には色の名がたくさん出てくるように感じられるであろう。
- 6) 『うたいつがれる童謡100』コロンビア(2009年)
- 7) つちだよしはる絵『うたえほん』グランまま社(1988年)、『うたえほんⅡ』グランまま社(1989年)、『うたえほんⅢ』グランまま社(2001年)
- 8) 上記 分析の対象とした絵本一覧を参照のこと。うち6冊(下記9)の6冊には形容詞が含まれていない。
- 9) 絵本一覧に挙げた中で『がたんごとんがたんごとん』、『おくちをあーん』、『おやすみなさいコッコさん』、『とっけこうやがあげた』、『おぼけがぞろぞろ』、『どんどこもんちゃん』には形容詞が無い。
- 10) 「行きはよいよい」は「よい」を一度と数えた。
- 11) 国立国語研究所 西尾寅弥『形容詞の意味用法の記述的研究』秀英出版(1971年)34頁
- 12) 前掲『形容詞の意味用法の記述的研究』35～36頁
- 13) 筆者が童謡の視点を ①一人称で心情や体験を述べる表現、②一人称で情景を描く表現 ③何者かになりきって一人称で述べる表現、④動物などに呼び掛ける表現(一人称)、⑤人に対して呼び掛ける表現(一人称)、⑥二役が問い答える表現(それぞれが一人称)、⑦直接話法表現(脚本型、何者かになりきった一人称で複数の視点を含む)、⑧第三者の視点で描く表現に分けると、第三者の視点で描く⑧は『うたいつがれる童謡』では100曲中12曲、『うたえほん』では80曲中1曲であり、『うたいつがれる童謡』も『うたえほん』もともに一人称視点が多いことが確認できる。『うたえほん』に第三者の視点で書かれる歌詞が極めて少ない理由は、わらべ歌をはじめ、遊びや行事の場面において、みんなで声を合わせて歌う歌を取録する意図がはたらいており、結果的に一人称視点の歌詞が多くなったためであろう。上記①「一人称で心情や体験を述べる表現」とは、歌詞の中に「ほく」「わたし」など一人称代名詞が表現されたり、「うれしい」「さびしい」等の感情形容詞が含まれたり、あたかも作詞家がある場において体験しているように書かれていたりする歌詞である。これらは、作詞家が子どもの立場になって書いていると言える。